

## 特集★最近の海外図書館事情を探る

## 自己との対話・他者との会話

— 21世紀のデンマーク公共図書館がめざすもの —

吉田右子

## 情報と文化へのアクセスを保証する公共図書館

デンマークは国内全域にわたる公共図書館ネットワークが、世界で最も早くから整備されてきた国である。生涯学習の理念に基づきすべてのコムーネ（日本の市町村に当たる行政単位）に公共図書館が設置され、住民の情報と文化へのアクセスの中心的機関として活発に利用されている。図書館資料の主流はまだ紙の書籍であるが電子書籍の貸出もはじまり、音楽・映像資料はパッケージ資料からダウンロードサービスへと移行しつつある。デンマークは図書館での貸出数に応じた補償金を創作者に支払う公共貸与権を世界に先駆けて導入した国であるが、電子書籍への適用については出版者との調整が難航し、図書館界の緊急かつ深刻な課題となっている。公共図書館では読書会、語学講座、講演会、映画上映会、コンサートなどの文化プログラムを実施するだけでなく、医療、法律、教育など生活相談や就業や学習支援を行う住民サポートセンターとしても機能している<sup>1)</sup>。

## にぎやかな午後3時の公共図書館

実際にデンマークの公共図書館の様子をみてみよう。新聞の閲覧を目当てに開館と同時にお気に入りの場所に直行するのは高齢男性が多い。午前中はグループで図書館を訪問する近隣の保育園や学校からの子どもたちや、育児休暇中の保護者と乳幼児がメインの利用者である。あらゆる年齢層の利用者が次々と図書館にやってくるが、日常生活に図書館通いが組み込まれている常連利用者は高齢女性に多い。

学校が終わった子どもたちが宿題をするために公共図書館めざしてやってくる午後3時頃、デンマークの公共図書館は最も活気づく。自主的な学びを重視し創造性と自律心を育むことを教育の最優先の目標として掲げるデンマークでは、宿題を

完成させるためには複数の情報源を調査したり友だちとの議論が必要であり、そのための情報と空間を提供する公共図書館が重要な役割を果たしている。子どもたちは持参した自分のコンピュータを開いて議論したり、コンピュータの回りに本を積み上げそれらを参照しながら勉強に取り組む。デンマークの公共図書館は飲食も自由なので、サンドイッチやお菓子を食べながら宿題に夢中になる光景もよくみられる。勉強に疲れたらマンガを読んだり公共図書館には必ず備え付けられているコンピュータゲームコーナーに移動して息抜きをすることもできる。この時間帯はグループでの利用が多いので、館内はざわめきと人々の会話に満たされている。

## デジタル機器の使い方は公共図書館で

デンマークでは行政文書の電子化が進み、たとえばコペンハーゲン・コムーネでは2014年から原則として紙媒体での行政文書が廃止された。学校教育や職場でのコンピュータの利用経験がない高齢者にとって電子機器の独学は困難であり、公共図書館は住民の情報アクセスに直結するデジタル機器利用のサポートに乗り出し、高齢者グループに向けたデジタル機器の講座を集中的に開催するようになった。インターネットやソーシャルネットワークの使い方、自治体のオンライン情報へのアクセスや利用法などの無料講座は分館も含めデンマーク全域の図書館で開催されている。また講座に加えてITヘルプと称する相談窓口も設けられている。

このサービスをさらに展開して訪問型ITサービスを試みた図書館もある。Viborg図書館では、「図書館があなたのところに！」というサービスを実施した。これはデジタル機器の出前講習会で、司書が小型のワゴン車にコンピュータ、タブレット



写真1. 「図書館があなたのところに！」と描かれたワゴン車型端末、スマートフォンなどを積みこんでリクエストを受けた高齢者施設や学校を訪問する新たなアウトリーチサービスである。訪問先では機器の講習会やデジタル機器を使ったワークショップを開催したり、さらには電子書籍端末を使った読書会やブックカフェの立ち上げにも関わる。デンマークでも図書館は資料を貸し出すところというイメージが強く、図書館が資料提供以外の多様なサービスを行っていることは意外に知られていない。このサービスはITサポートに関して実質的な効果をあげただけなく、司書が利用者とのコミュニケーションの密度を高めることで、利用者の図書館に対する認識を変える結果となったことが報告されている。

### 21世紀の公共図書館モデル

1970年代から1980年代にかけてデンマークの公共図書館は静寂の場から利用者同士が会話を交わす空間となり、現在では図書館が静かな空間だと思っている利用者はほとんどいない。Jochumsenらは自由度の高いデンマーク公共図書館のあり方をインスピレーションの空間、学びの空間、出会いの空間、創作空間からなる四空間モデルとして提示している。インスピレーション空間は多様なメディアを通じて文化的刺激を受け取る場、学びの空間は情報と知識への自由なアクセスを通してエンパワーメントを実現する場、出会いの空間は図書館を通して他者と関わり合い社会的参加を可能にする場、創作空間は創造のためのパフォーマンス・スペースである。四空間モデルをシンプルにして、四空間を図書館内に創り出す司書を要素として付加したのが図1である<sup>2)</sup>。四空間モデルには資料の保存・提供などの公共図書館の基本機



写真2. 図書館職員がIT機器の使い方をマンツーマンで教える能は明示されていないが、このモデルが情報・資料と利用者をつなげる図書館の中核的機能を基盤として成立していることはいうまでもない。

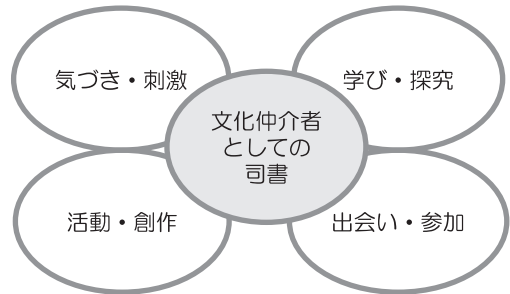


図1. 北欧における公共図書館のとらえかた

Jochumsen, Henrik.; Rasmussen, Casper Hvenegaard; Skot-Hansen, Dorte. The four spaces - a new model for the public library. *New Library World*, 2012, vol.113, no.11/12, p.589  
Figure 1に基づき筆者作成

図の中からここでは「出会いと社会参加」の空間／機能を取り上げてみたい。デンマークでは、ティーンエイジャーの移民の女子グループによる放課後の図書館への長時間の滞在が際立っており、公共図書館は学校と家庭以外の第三の場として不動の位置づけを獲得している。彼女たちの存在によって図書館が本質的に持つ公共空間としての可能性を再認識した司書は、出会いの場が社会参加の場へと接続されるような、10代を対象とするエンパワーメント・プログラムを模索している。一方、公共図書館はすでに地域住民同士、あるいは住民と政治家との議論の場、社会的ボランティア活動の拠点となっていて、住民の社会参加の契機を積極的に作り出してきた。

出会いの場／社会参加の空間は、図書館での自由な会話によって成立する。デンマークの公共図書館は、メディアを通じて自分と対話するだけで

なく、他者と会話しながらコミュニケーションを通じて文化と情報を共有する空間である。デンマークの公共図書館がにぎやかな理由はそこにある。公共図書館がその本領を発揮するには図書館内での自由な会話が<必要>なのである。

#### オープンライブラリーが示す21世紀の地域図書館

デンマークの図書館の開館時間は10時から19時までのところが多く、フルタイムの職を持っていると図書館に行く時間が取れない。1年に一度も図書館に行かないという人もたくさんいる。だが保育園時代の図書館通いからスタートし学齢期のグループでの利用を経て成人するまでに公共図書館の利用が各教育段階に自然に組み込まれているため、デンマークの人々にとって公共図書館は空気のような身近な存在であり、休職や解職や退職をきっかけに図書館に再び通いはじめる人が多いのは、図書館を利用することを感覚的におぼえているからである。

地域社会における公共図書館の定着をよく示すのが、デンマークで2010年頃から広まった職員不在の時間帯（8時から10時および17時から22時の設定が多い）を住民に開放するオープンライブラリー（åbne bibliotek）である。2015年現在、半数以上の図書館がこのシステムを導入している。住民は社会保障番号カード（Sundhedkort）を使って入館し、セルフサービスで自由に図書館を利用する。制度導入には自治体の経費削減の理由があり図書館界では議論があるが、利用者はオープンライブラリーを歓迎し、司書が勤務する時間帯にはレファレンスや読書相談サービスを利用し、セルフサービスの時間帯には資料の閲覧や借り出しを行うというように二つの時間帯を使い分けている。つまりデンマークでは「専門職によるサービスを受ける図書館」と「自分で自由に利用できる図書館」が同居している。

デンマークでオープンライブラリーがこれほど短期間に普及したのは複数の理由が重なっている。まず資料の貸出・返却・予約図書のパックアップがセルフサービスで行われていること、BDSや監視カメラが完備されているなど設備・施設面での条件が整っていることがあげられる。これに加えてさらに重要な点は、オープンライブラリーは住民同士の結束力が強い非都市地域から普及していった。そして全国に浸透する過程で懸念されて

いた盗難や器物損壊などはほとんど起こらなかったのである。デンマークおよび北欧諸国は世界的に社会信頼度の高い地域であり、こうした信頼関係が作り上げる成熟した地域社会がオープンライブラリーを支えている。オープンライブラリーが図書館界の期待するようなソーシャルキャピタルの醸成の場となっていくかは未知数だが、住民にそうした場がすでに手渡されたのである。

#### 情報と文化の媒介空間としての可能性

公共図書館で提供されるサービスは情報と資料の提供を基調にしつつも、社会状況と共に大きく変化してきた。だが一方で社会的・経済的に困難な状況に置かれた人々の情報アクセスをサポートするという図書館の存在意義が変化することはなかった。そしてその最も重要な役割を果たすために、図書館界は地域による図書館サービスの格差をなくすことに専心してきた。すべての自治体に公立の図書館が設置され図書館の基本サービスが専門職によって提供されていることは、デンマークの公共図書館の最大の強みである。そうした基盤の上に、情報と文化の媒介空間としての新しい可能性を常に模索し続けるデンマークの公共図書館が、21世紀の公共図書館の一つのモデルであることはまちがいない。

追記：本稿提出直後の2015年2月14日にコペンハーゲンでテロ事件が発生した。事件が起こったのは表現の自由をテーマとする講演会の会場であり、図書館が日頃から連携関係にあった文化施設であった。図書館は表現の自由への脅威に立ち向かう存在であり、今回のような悲惨な事件を前にしてその理念はいっそう強くなる。そうであってもなお、この事件は文化の共有と文化的多様性の尊重という公共図書館の根幹部分に重い問いを投げかけている。

#### 注

- 1) デンマーク公共図書館のプログラムについては以下の文献を参照。吉田右子「デンマークのにぎやかな公共図書館：平等・共有・セルフヘルプを実現する場所」新評論、2010、264p.
- 2) Jochumsenらの四空間モデルについては以下の文献を参照。吉田右子「対話とエンパワーメントを醸成する21世紀の北欧公共図書館」『現代の図書館』vol.52, no.2, 2014年6月, p.42-50.

(よしだ ゆうこ：筑波大学図書館情報メディア系)  
[NDC 10 : 016.23895 BSH : 図書館 (公共) -デンマーク]